

## 仏教とは何か(上)

2000年12月3日 岡本英夫先生

### (一)「仏」は「目覚める」

皆さんおはようございます。先程お話がありましたように、徳田さんが計画されて、山口、島根から私を含めて十三人がやって参りました。石垣島から白川さんもおいでくださり、本当にありがとうございます。

この会は隔月に開かせてもらっていて、いつもはこの日曜日は「観無量寿経」という經典のお話しなんですけど、今回は仏法のお話を聞かれるのが初めての方々がたくさんおありのようですので、話の内容をガラッと変えて、できるだけ分かりやすく、仏教の基本的なところをご一緒に見てみたいと思います。

まず、そもそも「仏教とは何か」ですよね。しかし、そのように大上段に構えるとなかなか大変なことになりますので、ごく簡単に見てみたいと思います。

そこで、すでに「仏教」という言葉そのものに、「仏教とは何か」という意味が全部尽くされていると言ってもいいんですね。名前というのは、何においてもそうでしょうが、そのものの全体を現わすわけです。だから仏教という宗教も、「仏」と「教」と書いたこの二文字のところに全体が尽くされているという感じがします。

私自身、仏教というものがどんなものか、大学三年の時に始めて知ったようなことで、それまではまったくゼロと言っていいぐらいに認識がありませんでした。ですから仏教という字を見ても、何も感じなかった。しかし少しずつ仏教の教えをお聞きして、なるほど仏教というのは、仏教という言葉そのものに大事なところが言い尽くされているんだなという感じがしてきました。

まず「仏」ということなんですけど、私も初め仏というのがよく分からなかった。世間一般にいろいろ言われていることが、知らず知らずの内に耳に入ってきます。そのようなことを聞いて集めた自分なりの結論は、しいて言えば、死んだ人のことを仏と言うのかなと。十代の頃はそう思っていましたね。そうすると、仏教というのは「死んだ人の教え」となる、それはちょっと変だなという感じがしていましたが、そのように大変な誤解をしていました。まったく無知でしたね。日本

は本当に仏教国と言えるのかどうか分かりませんが、そういう仏教の国に生きていて、本当に恥ずかしいようなことだったと思います。

その後、いろいろな因縁があって仏教の教えを聞くようになって、だんだんと「仏」という事の意味が知らされて参りました。その一番押さえるべきポイントは、b u d h という言葉ですね。端的に言えば、これが「仏」という文字になったとみていいかもしれません。その意味は「目覚める」ということです。漢字で表わせれば「覚」ですね。

## (二) 宗教は怖い？

長い間、私自身も仏教に対する大変な誤解を持っていました。今日の日本の多くの人々の、仏教に対する認識というものはどうでしょうか。仏教を間違いなく受け止めてゆくための一点をもし押さえるとすれば、この b u d h 即ち「目覚める」という一点になるかもしれないという感じがします。仏教というのは目覚めるものなんです。私達が目覚めていくというのが仏教なんだということですね。

今日いろいろな宗教がありますが、特にオーム真理教などの事件があって、マインド・コントロールということも問題にされ、宗教離れというか、宗教というものを積極的に嫌っていきような傾向が出てきていると言われます。親が子供に対して、友達同志の付き合いで、もし何か宗教の話しがちょっとでも出たら、そっちの方にいかないようにという、本当に宗教を嫌っていきというような過剰な反応というものが出ているような感じがありますね。

そのような場合、そもそも宗教というものをどのようなものと思っているかと言えば、おそらく目覚めるということの逆を思っているのではないのでしょうか。目覚めることの反対は「眠る」ということになりますね。何等かの宗教に関わっていくと精神的に眠っていく。眠っていくと言うならまだしも、狂ってしまうような、何か狂氣的な、人間として道を外すような、取り返しのつかないような、そのような間違った方向へいくのではないかというような不安・恐怖があって、宗教には関わらないようにと言われるのかもしれませんが。残念なことなんですけれども、そういうことがあるわけです。

しかし本来の宗教、本来の仏教というものは、私達が目覚めていくものです。

その一点を押さえたら、仏教に対する大きな間違いというものはもう起こらないのではないかと思います。私自身もそういうものだと、まったく知りませんでした。仏教と言ったら、こうってはなんですけども、お年を召された方が棺桶に片足突っ込んで、もう何の生きる望みもないから南無阿弥陀仏と念仏してこの世を終わっていくというようなものだろうと。だから仏教と聞いても何の力も感じなかったですね。仏教は誰のものかと言ったら、もう間違いなく年寄りのものだこう思っていましたね。ひどい誤解でした。

もちろんそれはまったくの間違いで、仏教は誰のものかと言ったら、それはもちろん老若男女全ての人のものですね。0才児には0才児に応じた仏教の教育がある。私達、一般に教育を受ける時に、0才児なら0才児の教育、一才児なら一才児の教育、そういう本来の教育を与えていくということがなければいけないと同じように、仏教も同じようなものだと思うんですよ。0才児には0才児に応じた仏教の教育というものがやっぱりなければいけない。

### (三) 人間の根源の教え

この世で、皆に共通して必要なものは、表現はおかしいんですけども大体「無料」なんです。お金はいらないんですよ。そういうものが二つあるんじゃないと思っています。一つは空気です。空気を吸うのにお金はいらないですね。空気を独占して、欲しい人は来なさいと言って売るといようなことはありません。皆、自由に空気は吸える。それで命を保ち、身体を養って、生きていけるわけですね。

丁度それと同じように、仏教というものも本来そのようなものではないでしょうか。人間を身体と心に分ければ、身体の方は空気で生きていける、心の方は仏教で生きていける。それが私達ではないかと思っています。極端な表現でしたが、申し上げたいのは、それほど仏教は人間にとって根源的なものだということです。

様々な宗教がある。さらに同じ仏教でもいろんな宗派がある。どれがいいのか、ということになりやすいですね。しかし親鸞聖人という方が明らかになさった浄土真宗という仏教は、そういう宗派的な位置付けではないんですね。本当の仏教とは何なのか、本当の宗教は何なのか、人間の生きる本当の道は何なのか、そういうものを明らかにしたのが浄土真宗というものなんですね。

私達は、まず宗教というものがあって、それがキリスト教もあればイスラム教もある、仏教もあると考える。その仏教が又各宗派にだんだんと細分化されていて、木の幹から枝がでて、小枝になってというように、その一本の小枝が浄土真宗とか、何かの宗派というような思いがあるかもしれませんが、浄土真宗はそうではないんですね。むしろ逆にだんだんと根源に帰っていったんですね。浄土真宗という名前そのものが又、そういうことを意味しているわけです。

幼稚園から小学校と、その年令に応じて、私達は国語や算数の授業を受けます。それは人間として生きていく上で無くてはならない教育なんですね。丁度それと同じように、人間として生きていく上で、仏教の教えというものを私達は受けていかなければいけない。

私が初めて仏教という存在を知ったのは大学三年の時です。その頃、少年練成会といって、大体小学生中心ですけど、子供達が夏、海水浴を兼ねて仏教のお話を聞く何日間かの会があって、その会のスタッフの仕事をしていました。その時につくづく思いましたね。私自身はこういうことがなかったんだと。大人になって初めて仏教に触れたわけです。もし自分が小学生ぐらいの頃から仏教に触れていたら、どれだけよかったらうかなと思いました。

人間が目覚めていく教えなんですから、もうこれは宗派とか、そういう次元の話ではないんです。ですからある意味では、今日、学校教育で行なわれている教育と、目覚めていくという意味での 仏教の教育が相まって、ひとつの本来の人間教育というものができるとはならないかなという思いがしています。

けれども御承知のように、教育基本法で公立学校においては宗教教育をしてはいけない、特定の宗教教育、特定の政治教育をしてはいけないとなっていますからね。それは仏教というものが、特定の宗教と位置付けられるというわけですよ。特定以前のものと言うか、もっと深い人間として目覚めていくものですね。教育基本法ができた当時は、そういう認識が当事者にはなかったかもしれないですが、その後の我が国の教育は、本当にある意味で残念なことになってきているのではないかなと思われてなりません。

そういう意味で、仏教とは何かとなった時に、世間ではいろいろ言われますが、けれどもいっぺん、これは私が目覚める教えなんだと、その目覚めるというところで押さえたら、もう大きな間違いはしないという感じがしますね。

#### (四) 自己に目覚める

そこで目覚めるということなのですが、いったい何に目覚めるかということで すね。歴史的に仏教が起こって二千五百年ぐらい経ちますから、その間いろんな方が、目覚めるということについておっしゃっておられるわけです。その中、代表的と思えるものを挙げて考えてみたいと思います。

第一は何といっても私自身、自己自身に目覚めるということです。自分が何であるかが分かるということです。これは大問題です。一生をあげて尋ねていくような問題ですね。

私は教えを聞き始めた頃、今から三十年ほど前ですが、生まれて初めて聞くわけですから右も左も分らないですよ。何か感銘をするものはもちろんあるんですが、言っている内容がよく分らないんですね。

その頃私には、目覚めるとはどういうことなのかという問いと、もう一つそれよりももう少し何処か奥の方で、何故目覚めなければいけないのかという問いがずっとあったような感じがします。教えを聞いていきましたら、自分というものをだんだんと知らされていくんですね。しかしそれは、「何と素晴らしい自分である ことか」というようなことではないんです。知らされてみると本当にお粗末というか、自己中心的というか、欲の深いというか、愚かというか、自己保身というか、 真実の道理などまったく問題にせず、俺が俺がというようなところで生きている 自分なんですね。

それはもう一口に言って、明るい自分では決してないんですね。これでいいぞと言えるような自分でもない。そういう自分を知らされていくわけですから、実感として、よしこの道をどんどん行こう、というようにはならないんです。ですから、もしやめられるものならやめようか、という思いが起こってくるんですね。聞始めた時はそれなりの感銘があって、よしこの教えを聞いていこうと思ったにも拘わらず、しばらくすると、やめられるものならやめようかという思いがおこる。それは人それぞれにあるんでしょうけれども、私の場合、最初の二、三年はひどかった。聞いていこうという一番最初の思いもかなり強かったんですが、やめようかという思いも又かなり強くなって、大いに矛盾しているんですね。

それで手帳のカレンダーに、やめようと思った日に丸印をつけました。二年ぐらい経ったら、六、七十程丸印がついていました。毎週一回程度はやめようと思

っていたんですね。本当に波があったんです。

そういうようなこともありましたから、何故自分を明らかにしないといけないのか、何故自分に目覚めていかないといけないかという問いがどうしても起こってきます。実はそのこのところを、仏教は大きく答えていたんです。

人間とはどのようなものかということ、ターニングポイントと言うか、転換点があるんです。人はもし本当の自分がどんなものであるのかが分かれば、その分かったという時点からワッと力が出て、明るく元気に願いを持って、どんなことが起こっても自暴自棄にならず、現実に取り組んで生きていくことができるんだと。そういうふう生きるのが本来の人間の生きる姿なんだと。こう明らかにしたのです。

初めはそうになってないですね。そうになってないものが遂にそのようになっていく、その転換点、それが「私が目覚める」という一点なんです。それを仏教は明らかにしたんだと思います。

そのこのところが分からなかったんです。それはもう分かるはずなどないと言えばその通りです。何と言っても自分自身が分かっていないし、仏教の教えも分かってないんですから。仏教が明らかにしたのは、「自分がハッキリと分かる、そこから人は変わる」ということだったんです。だから、目覚めていけ、ということを仏教は切々と説くのです。

## (五) 道徳との闘い

教えを聞いていく初めのうちは大変です。初めの私達の思いというのは、どうしても道徳的というか善悪でものを考える。そういう考え方がもう骨身に染み付いていますから。聞いていくとそういうお粗末な自分、醜い自分というのが少しずつ見えてくる感じがするわけです。その見えてきた自分をどう受け止めるかとなると、これまで持っていたその善悪の考え方で見てしまうわけです。

教えを聞くと、善くない自分が見えてくるわけですね。これは悪いと思うわけです。そこで、教えを聞くと自分が悪くなるわけですから、だから聞くのを止めようというふうになるんです。私の場合初めは本当に喘いだと言うような感じでした。

最初は、善いことは文字どおり善いわけで、悪い事はどうしても悪いんだとい

う思いがありますから、悪い自分というのが見えてきて、それを受け止めることができないんです。それが正に、正真正銘の自分なんだと受け止めることができない。それは善くないんだから、もっと頑張って善い人間になっていかなきゃいけないんだという方向に気持ちが動いていくわけですね。その思いで又仏法を聞くと、いやそうじゃなかったんだと、又悪い自分というものを知らされるというわけで、本当に行ったり来たりなんですね。

それで、私の場合をあまり申してもいけないんですけど、学生時代に聞き始めて、同じ学生と一緒に出発した仲間が何人かいたんです。その頃の雰囲気というのは、なかなか暗い雰囲気だったんですよ。教えを聞く友達同志が集まって話しをするんだから、皆元気で明るいのかといえば、そうじゃなくて、いつやめようかという話なんです。何とも若者らしくないような話なんですね。それでこっちもね、やめていこうとする人に「やめるな」と言うことができないんです。その力がないんですね。こっちも明日やめようかと思っているんですからね。それで実際、何人も友達がやめていきました。申し訳ないことだったなと思います。お互いそういうことが多かれ少なかれ、やっぱりあるんだと思います。

自分の持ち前の道徳的な考え方ですね、善いものはどこまでも善い、悪いものはどこまでも悪い、だから自分の内に何か悪いものが見えてきたら、これではいけないんだと思ってしまう。これが人間の考え方でしょう。仏法は違うのですね。自分の内に善いものであろうと悪いのであろうと、何であらうとそれは構わないというか、実は二次的な問題なんです。教えによって自分を知らされてみて、こういう自分が見えてきた、それが善い自分であらうと悪い自分であらうと、それは次の問題で、大事なのは教えによって自分自身を知らされるということそのものなんですね。ここが本当に大事なことだと思います。

## (六) 願いを持つ

そういう一つの山、関門というか、そういうものをだんだんと乗り越えていくということが具体的に大事な問題になってくるかと思います。そうしますと、次第に日常のいろんなことを縁にして、自分というものを又、もう一つ知らされる。本当の正真正銘の自分、飾った自分とかよそ行きの自分とかでなくて、本当の自分というものを知らされていく。知らされてみると、その時はある意味でショッ

クですね、俺はこんな人間か、という強い自己嫌悪です。だけどそれが紛れもない本当の自分であって、私は本当の私を生きるんだ、飾ったものは本当の自分ではないんだと。

そのようにして自分を受け止めていく歩み、そういうことが私が生きていく上での一番のベースになっている。その場面だけだとかなり暗いような感じがするかもしれませんが、決してそんなことはありませんね。本当の自分を知らされるところに、さっきも言いましたように力が出るんです。願いがおこるんですね。

この人生に対して願いを持って生きることができないとすれば、それはやはり自分自身を受け止められていないところからくるのでしょう。これが本当の私、嫌でもなんでも本当の私、私はこの私を生きる、というところにしっかりと立って生きていく。本当の私が、裸足でやっと大地に立つことができたということでしょう。そこに力が出てくるんです。それができていなければ力は十分には出ないんじゃないでしょうか。

教えを聞こうという思いは、相乗的にどんどん増えていくというか、もっと聞こう・もっと聞こうという思いが、年をとるにつれて起こってくるのじゃないでしょうか。だから聞き終わるといことがないわけです。本当に最後の一日まで教えを聞いていこう、そして本当の自分を知らされて、願いを持って生きていこうとなる。明日人生を終わるから願いを持つ必要がないんじゃないですよ。私というのは願いを持って生きてゆく存在、そして最後の一日まで願いを持って生きていくんだということですね。そういうような意味合いで、目覚めるとは、まず自己自身に目覚めるといこと事です。

## (七) 名を称える

もう一つ大きな柱は、「南無阿弥陀仏」に目覚めるといこと事です。最初から南無阿弥陀仏が出て申し訳ありませんね。しかし、大事なこと事です。

南無阿弥陀仏そのものに入る前に、そもそもこれはどんなものかといこと事です。南無阿弥陀仏といのは、私達が口で南無阿弥陀仏と念仏申す、その南無阿弥陀仏です。それを称名となといひます。名を称となえる、です。称はとなえる。名といのが仏様の名前、仏様の名前が南無阿弥陀仏です。さっきも言



ましたように、仏教という教え全体の名前ですね。

名前のことを考えだしたらもう興味が尽きないのですが、名前にそのものが持っている内容の全体が籠っているわけです。ですから私達が自己紹介をする時に、本当を言えば、名前だけを言えばいいんですね。本当はそこに全部が籠っているんですよ。しかし実際は、名前だけを言ってもらってもよく分からないから、住所は、年齢は、趣味は、などいろいろ聞いて情報集めをするのです。本来は名前だけで十分なんです。

試しに、例えば「クリントン大統領」というと、それだけでいろんな彼に関することがワッと出るでしょう。素晴らしいですね。「クリントン」というあの文字だけでよく分かるんです。

南無阿弥陀仏というのも様々な徳を持っている仏様の名前です。この名前のごとくに仏様の力のすべてがあるんですね。その名前を称えるわけです。称えるというのは口で南無阿弥陀仏と言うことです。称えるという時には、この「称」の字を書かないといけません。しかし二十年ぐらい前でしたか、当用漢字が常用漢字に替わりましてね、この「称」の字が使えなくなったんです。「となえる」は「唱える」と書くようになったんです。ですから小学校で「念仏を称える」と書いたら、間違いということになるのかもしれないですね。

しかし、「念仏を唱える」というのは間違いです。「唱える」は合唱するというように、声を出してうたうというという意味です。そうすると、もし「唱名」になったら、南無阿弥陀仏という発音を声を出して言うだけのことになるんです。これは間違いですね。

何故かと言えば、「称」の文字には歴史的な受け止めがあるわけなんです。今日の漢和辞典を見ても、「はかる、となえる、あげる、たたえる、ほめる、かなう」などの意味があります。「はかる」とか「かなう」というのは、たとえば大きな天秤計りがあるとしますね。右のお皿に私が乗る。そうすると左のお皿に何を乗せると釣り合うかという問題です。他のものでは釣り合いません。ただ、南無阿弥陀仏を乗せることによるのみ釣り合うんだという意味です。即ち、私という存在を本当に生かすのが南無阿弥陀仏なんだという意味合いです。

私が皿の上に乗るといっても、身体測定のようにじっと静かにしているわけではありません。私の現実の全てが乗るのです。迷いもあれば、苦しみもあります。

空しさもあれば、愚かでもあります。自惚れてもいれば、不条理に泣くこともあります。そのような私という人間が、自己自身を確実に受け止めて、世を怨まず、明るく堂々と、しかも社会に向かって生産的なことに身を捧げていく。こういうようなことがいったいどうすればできるのか。それが、南無阿弥陀仏なのです。南無阿弥陀仏の力によってできるという意味合いなのです。

本当に私を生かす力、それが南無阿弥陀仏。そういう意味でこの「称」の文字が使われてきたのです。

### (八) 真実をたたえる

もう一つは、「あげる」「たたえる」「ほめる」ということですが、南無阿弥陀仏と念仏申すことは、阿弥陀仏を称揚讃嘆することです。ただ南無阿弥陀仏という発音、音声を言っているのではなくて、仏様を讃えているのです。

讃えるということですが、或いは分かりにくいかもしれません。私にとって、この世において一番大事なもの、一番根源のものが見つかるということが、最も重要なことだと思います。私は仏教を聞く以前、高校生の頃から、この世の真実って一体何なんだろう、それを求めてみようという思いが少しずつ起こってきました。程度の差はあっても皆さんも同じだと思います。真実とは何なんだろうと、ずっと考えていたんです。いくら考えてもこんなもの分かるわけがないですね。それで仏教の教えを聞いた時、最初に感じたことは、この教えは、私が自分なりに漠然と求めていた「真実とは何か」に答えてくれている教えだと。そして真実というものは正に南無阿弥陀仏なんだということを微かに感じさせられました。

この世で一番大事なもの、それをもし真実という言葉で現わした時、仏教の教えを聞いて何に出会っていくのかと言えば、正にその真実に出会っていくんですね。せっかくこの世に生まれてきたのに、真実に出会うことなく一生を終わったら、何の為にこの世に生まれてきたのか分からない。自分という人間の心の底の願い、真実に出会いたいという願いがありますね。その願いがかなって真実に出会うことができ、その真実を讃えていくわけです。もちろん出会うといっても、ほんの僅かの出会い始めというものでしょうけれど。しかし質的には真実なんです。

私自身、そのところの的確な言葉が見つからないんですが、初めて真実なるものを知らされて、私がそれに対して何をするかというと、それが讃えていくということかなと思いますね。感謝であり、喜びであり、充実であり、申し訳なさであり、願心であり、そのような、これまでになかった確実な生きる手ごたえというものがそこにあり、本当に嬉しいのです。何か、そのようなものの全体を一つにしたものが、南無阿弥陀仏を讃嘆する、ということかなと思います。

南無阿弥陀仏と念仏申すということは、ある意味で非常に簡単な行為です。しかしそこでなされているのは真実に出会って真実を讃えていくということですね。まさに私達と真実との出遇いの場面です。本当にそういうことが起こるし、そうでないと私たちに救いというものはないのでしょうか。そういう意味が「称」という文字の内容として伝えられてきたんです。

そういうような内容がありますから、念仏を称えるという時に、唱の字を使ってもらおうと、これまでの二千五百年の歴史が吹っ飛んでしまうようなものなんです。

これらが一応南無阿弥陀仏というものの大枠なんです。私という人間の生涯の全体を真に生かすもの、自分が出会っていくべき真実、それが南無阿弥陀仏ということなんです。

### (九) 呼び覚<sup>さ</sup>ますはたらき

南無阿弥陀仏というのはまた、仏様が私に呼びかけている呼びかけです。真実なるものが私に呼びかけて下さっている。それなのに何故私が南無阿弥陀仏と言うのか、という問題ですね。

私が南無阿弥陀仏と言ったら、私が誰かに呼び掛けているような感じになりますよね。そこが念仏申すということの大変意味のあるところなんです。私達は自分で南無阿弥陀仏と念仏申す、その自分の声を聞いて南無阿弥陀仏に出会うことができるんです。仏様の徳、力というものを私達が頂いていく唯一の道が南無阿弥陀仏と念仏申すところにあるんです。

そういう意味で南無阿弥陀仏というのは、仏様が私に対して呼びかけるその呼びかけですね。そしてその呼びかけは呼び覚ましです。先程、目覚めると言いましたが、これですね。仏様が私を呼んで私を目覚めさす。南無阿弥陀仏はその

はたらき、その力なんですね。呼び覚まして私を生かす。そのはたらきですね。

呼び覚ますということを、他の言葉で言いましたら、智慧のはたらきでしょう。智慧というのは分かりやすい<sup>たと</sup>喩えで言えば光です。闇を打ち破るのが光りのはたらきですね。光りをあてなければ闇は絶対に晴れない。

仏教とは何か。文字がそれをよく現わしていると言いましたが、もう一つのポイントは目覚めさす「教え」なんです。私達が目覚めるためには教えがいる。これも私は、かつては考えてもいませんでした。よく、「<sup>きと</sup>悟る」ということを言いますね。仏教とは悟るんだと。これは主に禅宗的なものからきているのかもしれませんが、悟るというのはカッコいいわけですよ。人間というはずるいと言うか、苦労せずにパーッと悟るようなことを期待していますね。仏教はじっくりと教えを聞いて考えていくのです。（続く）